

信濃の中世武將を探る

大塔合戦における諸將

信濃守護小笠原氏と国人連合が激突した「大塔合戦」は、信州の中世史において特筆される事件で、応永七年（1399）九月二十四日に起った。六十年にも及ぶ長い抗争を続けた南北両朝が合体した明德三年（1392）から、わずか八年後のことであった。

信濃守護小笠原長秀の率いる軍勢は八百騎、それに対抗する村上信満ほか海野・高梨・井上らの国人連合は四千騎であった。戦いは九月二十四日亥の刻から戦いが始まり、以後、十月十八日まで二十日余の戦いが続いた。この戦いで守護方の將兵三百騎が、大塔の古要害に立て籠り、ついに全員が討死をとげたという激しい戦いが展開されたことから、「大塔合戦」と称される。

この大塔合戦の様子を伝える史料として、『市河文書』『大塔物語』『信州大塔軍記』があげられる。それらからこの合戦に参加した武士をひろい出すと以下のようなようになる。

守護方は、

小笠原信濃守長秀と曼茶羅一揆
中河三郎 飯田左馬助入道 山寺五郎

同 祐津党
淡路守貞幸 右京亮宗直 上総守貞信 三村孫三郎種貞

桜井 別府 小田中 実田 横尾 曲尾
(佐久勢として)

伴野 平賀 望月 桜井 高沼 州吉 小野沢 田口
海野宮内少輔幸義 幸義舎弟 中村平四郎 会田若下 飛賀留

田沢 塔原 深井 土肥 矢島
高梨薩摩守友尊 友尊嫡子 樟原次郎 上条介四郎 江部山城

草間大蔵 木島 吉田 菅間
井上左馬頭光頼 光頼舎弟 遠江守 万年 小柳 布野

中俣 須田伊豆守 島津刑部少輔(国忠)
仁科弾正少弼盛房 盛房舎弟 駿河守盛光 千国鬼八郎 沢戸五郎

穂高 戸度呂木 池田 庄科
(大文字一揆として)

宮高下綾守貞兼 春日 香坂左馬亮入道宗継 西牧
落合 小田切 窪寺 性存党 梶沢豊後守泰時 上原

神家 有賀美濃入道性存 性存党
矢崎 古田

守護方の武士の中には、武田・於曾・標葉・赤沢・坂西など、鎌倉初期にあらわれてこない武士が多くみられる。また、合戦に参加した武士の範囲は、北は下水内志久見郷地頭の市河氏から、南は下伊那の飯田南辺の地まで、信濃全域に及んでいる。これから、大塔合戦は信濃一國を巻き込んだ大合戦であったことがうかがわれる。そして、両軍の区分けを見ると、伊那谷はすべて守護方、その他の地方はほとんど

武田上野守 於曾七郎 古米左近將監入道
小笠原將監 山中常陸守 赤沢但馬守 赤沢駿河守
赤沢対馬守(秀国) 伊豆木美作守 下枝尾張守
下枝河内守 標葉若狭守 標葉出羽守 標葉七郎
榎木石見入道清忠 榎木五郎太郎 鳴海式部丞

関豊後守 坂西次郎長国

宮淵宮内左衛門尉 織戸肥後守 常葉入道
常葉入道嫡子 下総守 五郎 同 八郎

大井大蔵丞 下条伊豆守 下条美作守 布施兵庫助
宇木 中島 駒沢荒屋 髪白四郎

稲富源四郎 大境中務 島津大蔵 落合三郎

和田太郎 於利六郎 橋爪小三郎 赤須又三郎
住吉五郎 井深勘解由 飯沼六郎 宮田大和守

中越備中守 松岡次郎 知久佐渡守
市河刑部大輔入道興仙(頼房) 興仙甥 興仙若党 島田彦太郎
市河六郎頼重 江尻兵庫助

国人側は、

村上中務少輔満信 千田讚岐守信頼 飯沼四郎

風間宮内少輔 入山遠江守 寄相肥前守 雨宮孫五郎

雨宮与三 重富四郎 小島刑部少輔 飯野宮内少輔

横田美作守 広田掃部助 吉益蔵人 麻続山城守

生身大和守 浦野式部丞

祐津越後守遠光 祐津美濃入道法律 根津宮内少輔時貞

が国人連合軍の側であった。合戦そのものは守護方の敗北に終わり、塩崎城に逃げ込んだ長秀は万事窮したところを一族で守護代の大井光矩の仲裁により辛うじて国人連合との間に和睦が成立した。結果、長秀は京都に戻り、信濃守護職は解任されてしまった。

結城合戦における諸將

永享九年(1437)関東管領上杉憲実は鎌倉公方足利持氏との対立から、鎌倉を去って領国上野に引き揚げてしまった。翌年、持氏は憲実討伐軍を発したため、永享の乱が起った。乱は上杉氏を支援して幕府が乱に介入したことで、持氏方の敗戦となり持氏は自殺して鎌倉府は滅亡した。

永享十一年、持氏の遺児春王丸・安王丸は結城氏朝を頼り、小山氏、宇都宮氏ら旧持氏方の諸將を糾合して結城城に立て籠った。これを幕府が見過ごすはずもなく、憲実の弟上杉清方や信濃守護小笠原政康に命じて結城城の攻撃に向かわせた。これが「結城合戦」の始まりである。このとき、多くの信濃の武士が小笠原政康に従って出陣した。籠城軍の抵抗は頑強で戦いは年を越し、翌嘉吉元年(1441)四月の幕府軍による総攻撃で結城城は落城し、結城氏朝父子らは自害、春王丸・安王丸らは捕らえられたことで乱は終熄した。この結城合戦において、小笠原政康は幕府軍の陣中奉行を命ぜられた。

小笠原政康は結城城包囲の滞陣中の陣中警護と矢倉の番とを、引き連れていった信濃の武士と家人とに命じた。それは三十組に編成され、大武士団は単独で、小武士団は数氏で編成された。これを記したのが結

城陣番帳』で、当時における信濃武士の顔ぶれと勢力のほどがうかがわれるものである。ある。

「結城陣番帳」〔笠系大成付録「雑集」〕

抑関東下野国結城為退治、從京都諸軍勢被差遣候。（中略）信

州之諸侍並家人等光祿陣中之警護同矢倉之番次第

壹番 小笠原五郎殿（宗康）

二番 高梨殿

三番 須田殿

四番 井上殿

五番 若槻殿

六番 井上彦四郎殿

七番 須田式部丞殿

八番 村上殿代屋代殿

九番 栗田殿代井上孫四郎殿

十番 海野殿

十一番 藤沢殿

十二番 香坂殿

十三番 嶋津殿

十四番 諏訪信濃守殿 大原殿代（草一） 中沢殿代

甲斐沼殿代

十五番 小田切殿 窪寺殿

十六番 諏訪兵部大輔殿 知久殿 伴野殿 今田殿

十七番 赤沢殿 和田殿 同名但馬守殿 山家殿 武石殿（牧方）

十八番 永用殿（田九） 二木殿 竹田殿 熊蔵殿 西坂殿

十九番 坂西殿 後廳殿 大池殿 波多殿 同名中殿（小一）

二十番 犬甘殿 平瀨殿 村井殿 三村殿 北坂殿

廿一番 山中殿 下条殿 同名下野守殿 同名山田河内守殿

櫛置殿 折野殿 山中太郎殿 飯沼上野守殿

廿二番 於曾殿 下枝殿 於曾弥太郎殿 下条将監殿

下枝河内守殿 標葉与五郎殿 関殿 同名又六郎殿

廿三番 松岡殿 飯沼殿 黒田殿 名子殿 牛坂殿 吉田殿

赤沢殿 河野殿 飯沼殿 河野殿 片切殿 藤島殿 小井三殿

廿四番 飯島殿 大嶋殿 山寺殿 三穂殿

宮田殿 桑原殿 同名对馬守殿 万寿殿 大岩殿 横田殿

廿五番 桑原殿 同名对馬守殿 万寿殿 大岩殿 横田殿

同名式部少輔殿 漆田殿 生仁殿

廿六番 雨宮殿 清野殿 漆田殿 生仁殿

廿七番 大井三河守殿 同名河内守殿 同名对馬守殿

祢津遠江守殿 生田殿 関屋殿

廿八番 保科殿 寺尾殿 西条殿 同名越前守殿

廿九番 小田切越後守殿 同名遠江守殿 仙仁殿 今井殿

屋代大蔵丞殿 多久間殿 立屋殿

三十番 桐原殿 市村殿 同名阿波守殿 同名小次郎殿

雁箱殿 長嶋殿

右一日一夜三番被勤候社也（『信濃史料』八から）

以上、百余名に及ぶ武将の名が記されている。『結城戰場物語』によれば、この合戦に参加した信濃勢は三千余騎と記されていることから、三十番で割ると二番あたり約百名と計算される。

これだけの武士、信濃全域の国人領主をみずからの統率化において、守護小笠原家としては政康が初めてであった。このことは、信濃の守護小笠原氏が完全に国内を掌握できるようになったことを示すとともに、小笠原氏が全盛時代を迎え、信濃守護としての権力を確立したことを意味している。これが『結城陣番帳』の持つ大きな意味であった。